

ブエノスアイレスの異邦人

——トマス・エロイ・マルティネス『女王の飛翔』

山田 美雪

I. はじめに

本稿の目的は、アルゼンチンの作家トマス・エロイ・マルティネス (Tomás Eloy Martínez, 1934-2010) の長編小説『女王の飛翔 (El vuelo de la reina)』(2002)¹ に仮託されるアルゼンチン社会の諸相を、著者のジャーナリストとしての仕事を手掛かりに読み解くことである。

1960年代、週刊誌『プリメラ・プラナ (Primera Plana)』の編集部長として、アルゼンチンの報道刷新に大きく貢献したマルティネスは、1974年の自著への発禁処分につき、翌年アルゼンチン反同盟から脅迫されたことを機に出国、76年に始まる最後の軍政「汚い戦争」の間、約8年の亡命生活を送る。民政移管後に一度は帰国するものの、その後北米に「自主亡命」し、両国を往還しながら執筆活動を続けた。

国家間の絶え間ない越境と共に、作家としてのマルティネスを特徴づけるのは、小説とノンフィクションというジャンルの往還、そして混淆である。彼は自身の小説をして、カポーティ、メイラーらの小説の手法を用いて現実を語るジャーナリズムに対し、自分はジャーナリズムの手法で作られた物語を語るのだと主張していた²。重要なのは、執筆ジャンルの選択と創造が、しばしば現実において信じ難い事態が生じ、政府が虚構を創出してきたアルゼンチンのありようを捉える著者の試みと密接に結びついていることだ。とりわけ、自身の価値観を一変させた軍政と亡命体験後に、彼がジャーナリズムの仕事と並行して全7作中5作の小説を著していることは興味深く、これらの小説に、記者として彼が主張してきた—あるいは、そこから取りこぼされた—軍政後のアルゼンチンに対する省察が、形を変えて表象されている可能性を仮定できるように思われる。

本稿ではこれを踏まえ、2002年の長編第5作『女王の飛翔』の登場人物に仮託される意味を、同時期に発表されたエッセイ集『アルゼンチンの夢 (El sueño argentino)』³、およびその再編・追補版『失われた国家へのレクイエム (Réquiem por un país perdido)』⁴におけるマルティネスのアルゼンチン像省察に照らして検討する。本論前半では、倒錯した関係を成す主人公の男女が体現する、可視／不可視、正典／異端、中心／周縁、排他性／多様性という価値体系の二項対立を整理し、記憶と異邦人の存在が前項の優位を揺さぶる過程を検討する。後半では先述のエッセイを参照し、これらの図式が、著者が糾弾するアルゼンチン社会のメタファーであることを明らかにする。観照的距離を経て祖国を見つめたマルティネスの眼差しを探ると共に、そのエクリチュールの選択、役割につ

いても考察したい。

Ⅱ．可視と不可視のフーガ

『女王の飛翔』の主人公は、ブエノスアイレスの一流日刊誌『エル・ディアリオ』の編集長を務め、報道界で絶対的な権力を奮う“G.E.”カマルゴ、そして彼の部下の若き女性記者レイナ・レミスである。大統領の醜聞にまつわる取材を通して接近した彼らは、以後2年間海外への取材旅行を繰り返しながら公然の愛人関係を続け、レイナは記者として飛躍する。カマルゴは次第に過剰な独占欲と猜疑心に囚われ、監視や住居侵入、暴力を駆使してレイナを支配し始める。一方レイナはコロンビアでの取材を機に現地の記者と関係を持ち、カマルゴから離れていく。カマルゴは、ある難民のホームレスの男性にレイナを強姦させることでこれに復讐するが、レイナはなおカマルゴを拒絶し、錯乱したカマルゴは彼女を銃殺する。しかし裁判では、一時的な心神喪失状態による犯行とみなされ無罪判決がくだり、カマルゴは3年後に病死する。

物語の時間軸は極めて複雑に組み立てられ、語りの人称、時制もめまぐるしく入れ替わる。核となる上記の物語に加え、カマルゴの生い立ち等いくつもの挿話が盛り込まれ、さらにキリストと聖シモン、カマルゴの娘たち、酷似した出来事や同じ場面の反復等様々な「双子」のイメージが現れ、それらが渾然一体となりパラノイア的な世界を展開していく。

物語は、レイナを監視するカマルゴの描写で幕を開ける。

11時頃、カマルゴは毎夜の習慣どおり、レコンキスタ通りの自室のカーテンを開け（中略）女が彼の視角に入るのを待つ。（中略）彼女の一番の楽しみは、寝室の鏡の前で立ち止まり、この上なく時間をかけて服を脱いでいくことだ。カマルゴはその時、好きなだけ彼女を眺めることができる。（中略）細部を一つ残らず見逃さぬよう、カマルゴは、三脚に載せた（中略）望遠鏡から彼女を見守る。（11）

冒頭より、語りはカマルゴの視線と一体化し、窓枠と望遠鏡という二重のフレーム越しに、女の挑発的な身振りを執拗に捉えていく。提示されるのは、カマルゴの眼差しが作り上げる、外界と切り離された濃密な時空間だ。観察者カマルゴと被観察者レイナの間には、フェティシズムとナルシシズムが交錯する。

カマルゴは抑えきれない喜びをおぼえていた。女は鏡から離れると、ただ彼の視線にのみ支えられていた。（中略）そして彼が一瞬でも注意をそらせば、女は世界という大海のみなし児になるのだ。（12）

カマルゴが抱くのは、自身の視線で相手を領有し、創造しているという自負である。こ

の意識は、「神の御業」と自負する自身の男性性と融合し、絶対的な力の自覚へと繋がっていく。ダナ・ハラウェイは、見ることをめぐって、「視覚／見え方は、常に、見る力／権力に関わる問題であり、ひょっとすると、我々の視覚／映像化の実践に暗に内在する暴力の問題なのかもしれない」⁵と指摘している。カマルゴはまさに「マスター、大文字の男性／人間、唯一無二の神という位置」⁶からレイナを眺め、対象化する。見る事が孕む暴力性は、後に彼が彼女のイメージを映像に残すにあたり、カメラの略奪的性格により増強され、本物の暴力へと転化していく。

しかしながら、絶対的であるかに思われるカマルゴの視覚には、早くも不完全さが垣間見える。別の晩、取り乱した様子で部屋に帰ったレイナは、顔にあざを作り、唇から血を流した状態でカマルゴの視線に身を曝す。

傷は最近できたものだが、その見慣れぬ感覚は、どこかの過去の瞬間に属しているようだ。あるいは過去にできた傷が、ふいに再び姿を現したのかもしれない。(13)

そう遠くない過去に発生した暴力の記憶は、レイナを凝視していたはずのカマルゴの視界からぽっかりと抜け落ちている。不可視とされた近過去の事象は、こうして「今、ここ」という視野の外にあるものの存在を炙り出す。さらに視覚への信頼性は、カマルゴが自身に眼差しを向けるに至って揺らぎを見せる。

彼もまた、正面の部屋で、彼自身を見つめている。激しい月の煌きが身体に降りそそぎ、空っぽの部屋に置かれたもう一枚の鏡に彼自身の横顔を見せていた。だが鏡が露わにするものは彼自身のこだまにすぎず、彼そのものでは決してない。その男は彼そのものにはなり得ない。過去、他者の前に発散される力、彼が喚起する尊敬の念と恐れなくしては。(中略) 鏡のなかの像は、たくましい上半身には不釣り合いな、威厳の欠片もない、歪んだか細い脚を見せている。(18-19)

カマルゴは、理想の自己イメージのみを信じ、あるがままの醜い自身の鏡像を否定する。示されるのは、観察者の視線にフィルターをかける、自己愛的な歪みである。

ここで注目したいのは、不協和音として侵入する音だ。カマルゴの視線と女によってのみ作られる時空間には、カマルゴの部下からのコンコルド墜落事故をめぐる電話と共に、突如として外界の事象が乱入する。現実の事件が挿入されることにより、物語には「2000年7月25日の夜」という時間の座標が初めて明確に与えられる。この電話に続きカマルゴが窓を開けると、部屋には繁華街の雑踏やテレビの騒音がなだれ込む。レコンキスタ通りは金融街として知られるが、レイナのアパートは、人々が退社した後はほとんど人目につくことがない、大都市の死角とも言うべき場所である。外界から届く音は、この部屋、ブエノスアイレス、アルゼンチンの外部で同時に進行している世界の出来事を想起させ、

さらに「遠くの音は奇妙なことに、彼自身の声を聴くことを許した：難聴の、盲目の、欲望の目が彼の最も奥深い所で開くのが聴こえる」(16)。カマルゴの監視部屋で流れるセザール・フランクの弦楽四重奏が暗示するように、物語世界ではマクロの物語とミクロの物語が、対位法のように二つの軌道を描き、響き合いながら進行しているのだ。

このように、極視的な描写で幕を開ける『女王の飛翔』第1章は、逆説的に、今、ここという視界の外にあるものの存在を浮き彫りにし、観察者の自己愛的な歪みを暴き出す。さらに「外界」の事象が、主人公に現実を把握するための遠近感覚を与え、自分の内奥との対峙を促すことを押さえておきたい。本作にはレイナを見つめるカマルゴの描写が今後も複数回挿入され、螺旋を描くように進んでいく。

Ⅲ. 正典と異端—捨象される記憶

それでは、冒頭で提示された可視と不可視の歪な関係は、作中でいかに敷衍されているだろうか。第二章で、物語はレイナとカマルゴが出会った1997年に遡る。編集部で初めて顔を合わせた彼らは、直後に大統領とその側近、親族による武器不正輸出を知るところとなる。政権側は、大統領がキリスト降臨を目撃したというニュースを流しこの醜聞から国民の目を逸らそうとし、ディアリオ誌は、キリスト教に精通したレイナの奮闘で大統領の主張の矛盾を暴き、これに抵抗する。「俺は戦争も平和も望んじやない。正義を下そうとも思っていない。(中略)ただブエノスアイレスで何かが腐臭を放っていることを、俺と同じように人々にも知らせただけだ」(40)というカマルゴの口上に表れるのは、国家が不可視の領域に閉じ込める真実を白日の下に曝そうとする、記者としての気概である。

しかしながら、書き手としてのカマルゴの姿勢は、実は大きな危険と矛盾を孕んでいる。カマルゴは毎朝無人の編集部を闊歩し満足感に浸る—「カマルゴ、世界はお前の思考の周りを巡り続けるに違いない。そしてお前が見る物の周りを。なぜならお前は全てを見るから」(23)。興味深いのは、前節でも見られた彼の「神」としての視線が、書くことがもたらす権力の自覚に繋がっていることだ。カマルゴは「彼一人に書かせてもらえるなら、この新聞はどれだけ良くなることだろう。彼が書けば、世界はどれだけ良くなるだろう」(20)と考える。ここに表れるのは、書くことで現実を創り出すという、「創造主」としての自負である。カマルゴは、記事にすべき事件を選び、一面に掲載する出来事を選ぶため、事件の重要度を順位付けする。それはドクサを浸透させようとする政府と同じように、不可視のもの、書かれないものを生んでいるということではないか。視界から追いやること、書かないこと、忘れることの相関性を考慮するなら、カマルゴは人々の記憶に残すべき事実を峻別し、多くの出来事に忘却を強いるという暴力を、自分もまた行使していると言える。

そもそもブエノスアイレスの報道界の頂点に君臨し、権力を恣にするカマルゴは、彼の

意志に従わない者を許さず、目的のためには周囲の人間を利用することも違法行為も厭わない。彼の「王国」たる編集部は、彼が弾劾を願う腐敗した政府の権力構造を、そのままなぞっているのだ。

興味深いのは、彼の言説が捨象する事柄である。ディアリオ誌の編集室では世界の事件を伝えるテレビのニュース番組が「バッハのカノンのように繰り返される」。しかし国内の大事件の発生により、「外部」の事象はしばしば周縁に追いやられる。

午前9時を回る頃には、そのニュースが何度も繰り返されたため、他のあらゆる現実の光は消えてしまった。ダイアナ妃とカルカッタのマザー・テレサに捧げられた祭壇も、消費社会に宛てたユナボマーの手紙も、クメール・ルージュによる瀕死のポル・ポトの裁判も、コソヴォの人種の坩堝のことも、そしてフアン・マヌエル・ファクンドによるシンガポールの銀行への入金も、全て忘れられた。(87)

一方カマルゴが海外に眼差しを向ける場合も、その視線の対象は限られている。彼は政変や大きな物語を進んで報じさせる一方、市井の人々の営みには無関心である。しばしば取材旅行で海外を訪れるが、自身が赴くのはいわゆる先進国や欧米ばかりであり、そこで接触するのは各国の政財界の大物や、一流の文学者たちである。カマルゴは、些末な事件や人々の物語を、扱う意義のない事象とみなし、不可視の領域に追いやるという矛盾を抱えているのである。

以上のように、カマルゴは書き手として可視/不可視とする物語を選び、周縁を捨象する。一方このカマルゴに相對するのが、レイナという人物だ。レイナはカマルゴに報道のいろはを教示され、周囲から彼のパロディを演じていると思われるほどに、その高慢な態度までも身に着けていく。レイナはその過剰な自己への信頼において、カマルゴに極似した人物だといえるが、両者の不遜さの所以は、実は大きく異なっている。レイナは思春期の頃から異端の思想、とりわけ、イエス・キリストに双子の兄弟シモンが存在したとするグノーシス派の説に並々ならぬ関心を持ち、保守的な教師や両親から反抗分子とみなされてきた。すなわち彼女のアイデンティティは、正統や権威とされている通念に疑問を投げかけることにある。興味深いのは、彼女の異端思想への関心が、書くという問題に直結していることだ。数ある預言者の中でキリスト一人が歴史に名を刻むことになった理由は、彼の物語が書かれたからであるというレイナの主張(106)は、書かれることのなかった物語の可能性を暗示する。レイナは、カマルゴが自身のためにポストを用意し、期せずして記者としての成功が約束されてしまったことに戸惑いを隠さない。

だが、彼女が思い描いていた人生はこうではなかった。彼女は詩を、あるいはキリストの時代にまつわる考古学的な長文エッセイを、イサーク・バベルの文章のように起こる出来

事は少なく、レイモンド・カーヴァーの文章のように驚くべきことは何も起きない短篇小説を書きたかったのだ。彼女はそのような文章によって記憶されるはずだった。新聞が日々散らす、翌日には別の火花で忘れ去られてしまうような火花によってではなく。(175)

レイナが理想とする文章は、正典に対する外伝、カマルゴが捨象する非中心的な主題を掬い上げる文章、彼女独自のエクリチュールである。それはロラン・バルトが他なるものを受け付けられない権力内的言語活動に対して提示した、権力外的言語活動を想起させる。「公式の物語」「historia oficial」に対する疑問符とは、同時に、「公式の歴史」に対するそれとも解釈できよう。

カマルゴは、この異端思想に不快感を露わにする。それはおそらく唯一神の否定が、「マスター、大文字の男性／人間、唯一無二の神」としてのカマルゴの優位の否定をも連想させるからに違いない。レイナの疑念と言説はざわめきとなり、中心に依拠するカマルゴを攪乱するのである。

このように、カマルゴとレイナは中心と周縁、可視と不可視への志向を巡り対照を成す。ここで注目したいのは、真実の創造者として強力なアイデンティティを誇るカマルゴが、実は不可視の領域を抱えていることだ。第4章で、物語はカマルゴの生い立ちに遡り、カマルゴの母が息子に直接手を触れることを頑なに拒み続けた挙句、彼がまだ幼い頃に愛人と出奔したこと、その後彼女の全ての写真を父が焼却したために、カマルゴには母の顔を思い描くこともできなくなったことが明らかになる。

母のイメージはある身体から別の身体へ、ある顔から別の顔へと移動し、幾つも存在するゆえに、カマルゴはそのどれか一つに固定させることができなかつた—母の移ろいやすさは彼自身の移ろいやすさでもあった。彼自身であるにも拘らず、彼が毎日新たになりつつある姿—ほとんどあらゆる瞬間に別の人間となり、自分であると認識するのに苦勞するような他者。(65)

自我の形成期に起きた母との肉体的、精神的断絶は、カマルゴ自身のアイデンティティ確立をも困難にした。彼は母を探して大都市ブエノスアイレスに住み続ける。なぜなら、「母が隠れ得る唯一の場所はブエノスアイレスだった、この街は無限に続く鏡の都市、そこで生は混同し、反復されるのだから」(70)。そのありようは、アルベール・カミュ『異邦人』を巡るジュリア・クリステヴァの言葉を想起させる。

往々にして本人も気づかずにいる隠れた傷が人を彷徨へ追いたてる。愛されざる者、しかし本人はその傷を認めたがらない。(中略) 母親の世界から疎外された者。(中略) 彼が求めてゆくのは目に見えない約束の地、実在しないが、夢の中では彼の領土、その名は彼方

という⁷。

「ホーム」の喪失はその後カマルゴにつきまとう。北米出身の妻は、双子の娘たちと共に故郷で暮らし、娘の一人は病で瀕死の状態にある。そもそも妻は「一部のアングロ・サクソン人が貧しい国—あるいは彼女が貧しい文化と信じるもの—に対して抱く御しがたい好奇心から、自らを解放できなかった」(27)人物で、アルゼンチンをホームと認めることはついぞなかった。カマルゴはブエノスアイレスにしながら、常に安住の地無き「異邦人」であったと言えるだろう。

皮肉にも、アイデンティティの不確かさと書くことは、カマルゴの人生で表裏一体の関係にある。母を探してブエノスアイレス中の老人ホームを訪れた若きカマルゴは、偶然ある施設における不正の実態を知り、その告発記事により記者として脚光を浴びる。ルーツの希薄さゆえに明確な自己イメージを持ちえないカマルゴは、書くことを通して絶対的な現実を創造し、アイデンティティすら創りだしてきたのである。

さらにこのトラウマは、記憶の不可視化・修正という現象を生む。物語の進行と共に、カマルゴがレイナに惹かれた理由は、その風貌が意識下に残る母の姿に似ていたためであると明らかになる。この事実を自覚するにつれ、カマルゴは強権的な態度を発動していく。彼が一貫して恐れるのは、精神的な傷と弱さを暴かれることであり、彼はそれゆえに記憶を嫌悪する。

存在には必ず記憶がある、どれほどささやかで儂いものであっても、そしてその記憶はいつもお前を別の人間、別の物質に変えてしまう。(中略)だからお前は何かを覚えていたいとは決して思わないだろう、カマルゴ。記憶がお前を修正したり、お前がお前であることを妨げたりしないように。(247)

記憶が個人を弱くすると考える彼は、冒頭で自身の身体的醜さを直視しまいとしたように、理想的な自己イメージに合わない記憶を抹消し、レイナがホーム無き身という彼の傷に共に向き合おうとする度、攻撃性を露わにする。容態が悪化した娘の元に向かうよう促された時、またカマルゴの生い立ちを知ったレイナが彼を慰めようとした時、カマルゴは怒りで「眼が見えなくなり、別人になって」(191)彼女を殴る。実はこの2度目の暴行こそ、第1章でレイナが負っていた怪我の真相に他ならない。興味深いのは、カマルゴが自身の加害行為を忘却することである。

お前の人生で起こったいくつかの出来事は、お前ではなく、お前の記憶と肉体の外にいる何者かに起こっているのだ—過去から動こうとしない何者かに。例えば、望遠鏡越しに女を観察しながら、お前は彼女の唇が裂け、あごが腫れあがっているのを見て不思議に思うだろう。(217)

理想の自己像にとって不都合な外傷を否定するカマルゴは、自らも加害者となり、やがてその記憶すら忘れてしまう。これまでの引用箇所にも見られるように、本作では断続的に3人称に代わる2人称の語り手が現れ、カマルゴに呼びかける。不明瞭な場所から呼びかけるこの声の主体は、カマルゴが記憶の不可視の領域に押し込めた、傷ついた彼自身に他なるまい。

IV. 他者の眼差し―ブエノスアイレスの難民たち

以上のように、可視と不可視のテーマは、カマルゴとレイナをして、書かれる現実と書かれない現実というエクリチュールの問題に発展する。ジャーナリストとして、個人としての揺るぎなき自己イメージを維持するために、カマルゴの視界の外に追いやられるのは、他者の物語とデラシネとしての自らの記憶という二つの他者性に他ならない。

ここで注目したいのは、レイナとカマルゴが共に経験する具体的な「他者」との出会いである。カマルゴとの関係が始まってまもなく、郊外の取材先からブエノスアイレスに戻ったレイナは、移民とホームレスの群れに遭遇し衝撃を受ける。

年老いたユダヤ人が営む装身具店と偽ブランド品の服を売る韓国人の店を隔てる玄関と狭い通りに、物乞いの集団が横たわっていた。かさぶたと傷で顔が崩れた3、4歳の女の子が、母親の目を盗んでレイナのくるぶしを掴み小銭をねだった。密輸品の携帯電話や天然ハーブを提供するペルー人の露店のテントと露台の間に、物欲しげな子供たちの群れが現れる。排泄物の匂い、疥癬や虱の恐怖に圧倒され、レイナは小銭をひと掴み落とすと走ってその場から逃げた。(171-172)

続いてレイナは、かつて文学者たちが集う格式高い店であったカフェ「ラ・ペルラ」が、不況の生み出した浮浪者たちの溜まり場となっている様を見て愕然とする。そもそも彼女は、不況に喘ぐ人々について、記者としての無力感を吐露していた。

一体どんな深淵に、この惨めな国は墜ちてしまったのだろう。(中略) 私が書く物は、何かの役に立つのだろうか？(中略) なんの役にも立たない、一つとして救いにはならないと彼女は思う。(112)

彼女が見出す南米やアジアからの移民、浮浪者たちは、カマルゴが関心の対象とする人々とは対照的である。現に彼は、レイナが伝えるこれらの逸話も、その鋭い指摘も一切意に介さない。

夜家に帰ると通りは空っぽ。見えるものといったら、浮浪者がはい回っている姿だけ。私たちは気づいていないけれど、ビッテ[カマルゴ]、ブエノスアイレスは変わりつつあるの

よ。幼虫に還ろうとしている蝶のように (213)

ブエノスアイレスの「他者」に目を見開かれたレイナは、やがてテロリスト集団のリーダーに密着取材をするため訪れたコロンビアの密林で現地の記者ヘルマンと肉体関係を持ち、彼と会うために不正な国外出張を繰り返すようになる。そして時期を同じくして、密かにグノーシス派についてのエッセイを書き始める。表向きは記者としての務めを果たしながらも、彼女はカマルゴの指導を受ける以前の自らのエクリチュールへと回帰する。こうしてレイナは、公私共にカマルゴの手中に収まらなくなる。「厳密な二重性と対称の世界を好み、不確かさを排除しようとするカマルゴは、無限に多様な繋がりを成すレイナを支配することはできない⁸」のだ。

ここで着目したいのは、カマルゴと「異邦人」との決定的な邂逅である。コロンビアから帰国したレイナの様子を不審に思ったカマルゴは、彼女の留守中に部屋に侵入して私物や電子メールを漁り、監視と盗撮行為を繰り返す。この時カマルゴは、レイナのアパートに隣接する建物の前に外国人浮浪者の男女が寝泊まりしており、部屋に侵入する度に彼らの目に触れざるを得ないことに気づく。唐突に登場したように見えるこの二人は、「その私的な生活が公的な領域で進行している⁹」にも拘わらず、人々の視界から抜け落ちている存在であり、カマルゴにとっても自身の目標達成の障害となって初めて可視化する。そこに存在しながら物語の背景に留まっていた都市の異邦人が、ここで彼の前に現前化するのである。

コソヴォ紛争を逃れてセルビアからアルゼンチンに渡り、路上生活を余儀なくされるこの男女は、故国としての「ホーム」も、今いる土地での「ホーム」も喪失した状態にある。さらに彼らは不法滞在者として入国し、ブエノスアイレスに向かう途上で強盗にパスポートを奪われたため、書類上宙に浮いた人間ということになる。また、モミールという名の男性の難民は、HIVと見られる感染症に冒されており、幾重にも他者性をまとった人物だと言える。ジョディー・パリスは、本作におけるエイズのメタファーを分析した論考でこう指摘している。

モミールは何重もの疎外を経験する—「コソヴォ紛争による難民」(150)として、彼は祖国から引き離され、戦争の暴力と訴追から逃れるために闘争を余儀なくされた。だが新たな社会アルゼンチンでは、彼は新たに疎外された空間に住む—外国人であるだけでなく、死の病の運び手であることは、彼を家を持たない社会の^{パ-リ}のけ者にするのである¹⁰。

カマルゴは彼らを遠ざけることに失敗すると、不貞を犯したレイナに「教訓を与えるために必要な武器」(154)としてモミールを利用する。スーザン・ソントグは「病気を想像することと外来性を想像することの間にはつながりがある。(中略)それは、太古の時代

に、自分たちではない者と、異質の者と同一視された悪の概念そのものに根差しているのかもしれない¹¹」と指摘し、特に「エイズの記述では、敵は病気を起こすもの、外部から来る伝染性の使者、となる¹²」と述べている。パリスも指摘するように、カマルゴは、レイナが「コロンビア人男性」と密通した後にカマルゴと関係を持ち、「さまざまな性病と熱帯の感染症」にカマルゴの身を曝したことへの相応しい罰として、HIVに感染したモミールに彼女を暴行させる。ここで難民たるモミールへの偏見と同時に照射されるのは、カマルゴがヘルマンそしてコロンビアという異国に対して抱く偏見だ。それは北米出身のカマルゴの妻が捨てきれなかった「貧しき」アルゼンチンに対する奇異の眼を、他の南米諸国に対するアルゼンチン人のそれへとずらしたものに他なるまい。露呈するのは、カマルゴというアルゼンチン人が抱く「南」への偏見である。

さらに注目したいのは、コソヴォ紛争を逃れたセルビア人難民というこの男女の出自が、作中で繰り返し指摘されている点だ。先述のように、カマルゴとレイナは、大統領とその一族、閣僚らによる不正な武器輸出疑惑を追及してきた。本作の大統領のモデルたるカルロス・メナム大統領は、実際に1991年から1995年にかけてクロアチアとエクアドルに武器を不正供与し、莫大な利益を得たことが明らかになっているが¹³、作中での武器の輸出先は、クロアチア、アルバニア、ボスニア、そしてセルビアのいずれかと目されている。すなわち彼らは、件の大統領が利益を得るきっかけとなった紛争の犠牲者かもしれないのである。

本作におけるユーゴ紛争への言及はこれに留まらない。先述のように、大統領キリスト幻視事件の余波で忘れられた同日の報道には、コソヴォの人種の垣塙についての情報が含まれていた。さらにレイナへの復讐計画実行日のディアリオ誌では、本来前日に発生したミロシェヴィッチユーゴ連邦大統領の失脚が第一面で報じられる予定で、スペインの作家ファン・ゴイティソーロによる精緻なレポートも用意されていた。だが半数のアルゼンチン閣僚の退任という「自国」での政変発生に伴い、これらは全て破棄される。

物語には近くに遠くに、ユーゴ内戦の報が、通奏低音として響いていたのである。しかしながら、カマルゴがこれらの大きな事象と目の前のモミールらを結びつけることは決してなく、まして心を動かされることは微塵もない。ここで露呈するのは、自国の政府の不正糾弾には熱心であったジャーナリストが、その鎖の輪の先に繋がっている生身の人間を目前にした時の、驚くべき想像力と共感の欠如である。モミールと女のために偽造パスポートの手配を命じられたカマルゴの部下シカルディは、ポーランド発行の盗難パスポートを用意し、こう弁明する。

私たちが出国させようとしているごろつき共は、クロアチア人だとおっしゃいましたよね？
セルビア人、それともモンテネグロ人でしたっけ？誰も気づきませんよ、そんな違いには。
セルビア人、ポーランド人、ブルガリア人—みんな同じ、根なし草です。(157)

露わになるのは、作中で言及される実在の作家ファン・ゴイティソーロが、実際に内戦下のサラエヴォから糾弾した「トカゲかへびのような無関心¹⁴」そのものだ。

このように、難民の男女に対するカマルゴの反応は、他者に対するアルゼンチン人、またジャーナリストの無関心と偏見を暴き出す。カマルゴはこの男女を疎外された人物とみなし、市民権と社会的権力、健全な肉体を持つ自分に従属する立場であると信じて疑わない。

しかしながら、はたしてモミールらは受動的な被虐者としてのみ描かれているだろうか？ 彼らは別の不法移民たちとの間に独自のルールを築き、「暗く汚い都市のくぼみが、彼らが彼ら自身であること、生きていると感じることを許す唯一の場であるかのように」（103）、何度保護されても必ずこの路地に戻ってくる。彼らはカマルゴに対して「まるで貧窮とは選択の問題であり、敗北ではないと言うように、横柄な話し方」（151-152）を貫き、彼が復讐協力の代償に故郷に帰るための金銭提供を申し出ると、パスポートとさらなる金額を要求し、彼を激怒させる。彼らの様相は、クリステヴァの以下の言葉を想起させる。

外人は、自分がかきたてる憎悪、少なくとも苛立ち（中略）に出会っても驚いたりはしない。（中略）外人はこの隔たりによって自分を強化する。（中略）他の人々は単一価値の轍にはまりこんでいるのに自分は物事を、自分自身をも相対的に捉えている、と¹⁵。

カマルゴの思考から抜け落ちているのは、モミールらも主体としてカマルゴを見ているという事実である。その眼差しは、彼が安泰であると信じる自己の脆さを見通し、その虚勢を揺さぶっていく。

何より興味深いのは、モミールと女が言語によってカマルゴの自我を攪乱することだ。カマルゴは当初、「舌のない、世界と関わりを持たないこの田舎者が、どうして彼を裏切れるだろう？」（153）と考える。確かに最低限のスペイン語知識しか持たないモミールらは、ブエノスアイレスでは言語的少数者である。しかし彼らと交渉するにあたり、2人対1人となったカマルゴは、彼には「一つの単語も理解できない、遠くの言語」（109）たるセルビア語の方言で話す彼らを前に、突如として言語的マイノリティの立場に置かれることになる。カマルゴは僅かなセルビア語表現を覚えるものの、意思伝達の大半をジェスチャーに頼るしかない。言語を担保にしたカマルゴの優位性はここで無化し、彼らの関係は逆転するのである。さらにモミールらがどこまでスペイン語を理解していないのかも疑わしい。最後まで名前の明かされない女性の難民はカマルゴへの不審を貫き、明らかに「ありがとう」というスペイン語を知っているのにカマルゴに対してはその言葉を言わず、敵意をむき出しにする。（151）彼女はいわば、相手への信頼に応じて言語知識を使い分けているように思われる。

実はレイナとカマルゴの関係においても、言語は極めて重要な意味を持つ。カマルゴが

最初にレイナを殴打した直後、レイナは自分と彼の間でのみ通じる独自の言語を使い始める。性的欲望を表現する遊戯として始まったこの造語は、やがて両者が知る様々な言語(レイナのアラム語とポルトガル語、カマルゴの英語とイタリア語、チェコ語(212))の諸要素を取り込み拡張されていく。これまでカマルゴは、効果的な言語的レトリックをレイナに教える立場であり、また英語が不得手なレイナは、取材旅行で常にカマルゴに依存した状態にあった。しかし彼女は、この創作言語の使用において初めて主導権を握る¹⁶。興味深いのは、この言葉が複数の言語を寄せて造られたハイブリッドな言語であることだ。「あらゆる構築されたものは破壊することが出来る。女性の権力は、まさに疎外された状況の中に見出される」というギジェールの論¹⁷、またハラウェイの概念を敷衍すれば、レイナは「共通言語」に対する「言語混淆状態」^{ヘテログロッシア}を創りだすことで、男性権威に抵抗していると考えられる。同時にその特徴は、イタリア系移民の口語を中心に様々な言葉を取り込んで成立したブエノスアイレスの俗語、「ルンファルド」をも連想させる。それは19世紀にアルゼンチン中央集権派の指導者たちが目ざした「ただ一つの、教育された言語が話される国家¹⁸」に対抗する雑多な言語であり、権力外的言説を目指す彼女のエクリチュールに通じるものだ。レイナはこの後間もなくヘルマンと出会い、先述のように自身の理想の文章に回帰する。このように、言葉によって世界を創造し、支配してきたと自負するカマルゴの自我は、変形し融合する可塑的な言語に攪乱されるのである。

言葉を媒介としたカマルゴの自我の崩壊は、まもなく復讐決行の場面において決定的なものとなる。パリスの分析通り、そもそも熱帯の病を恐れるカマルゴは、他者の肉体と男性性にレイナへの暴行を委託するしかない。この屈辱に加え、モミールは彼女を暴行するにあたり、カマルゴが魅了されてきたレイナの肉体に反応を示さず、彼の自尊心を傷つける。さらにカマルゴが作戦の変更を提案すると、モミールは粗野ながら確かなスペイン語で「これは俺にとっても難しいが、あんたにはもっとずっと難しいだろう」(238)と言い放ち、彼を打ちのめす。こうしてカマルゴは、男性性と言語という、自身が力の拠り所としてきた二つの要素で主権を失う。さらに全てが終わった後、新たなパスポートを手に入れこの地を去る難民の女は、カマルゴに決定的な問いを投げかける。

おまえを執拗に疑い続けてきた歯の無い女は、今、おまえのことなど聞いたこともなく、お前に恐怖を掻き立てられでもしたかのように、おまえの名を聴くことすら拒むように、おまえを見る。“Tko ste vi?”—女は執拗に尋ねる。一語一語が、犬のごとくおまえの喉元に飛びかかってくるようだ。「あなたは、一体、誰？」(240)

『レイナの飛翔』第9章は女のこの台詞で終了する。カマルゴがこの実存的問いに答えることはなく、残る2章での彼の言動が、虚空に投げ出された問いに対する間接的解答となる。カマルゴが視界から捨象してきた異邦人は、こうして新たなアイデンティティを手に入れ祖国に帰還し、一方確かなものに見えたカマルゴの自我の鎧は剥ぎ取られ、基盤無き

空虚な実体、異邦人たる自身に、彼を向き合わざるを得なくさせるのだ。

V. 『アルゼンチンの夢』『失われた国家へのレクイエム』—アルゼンチン人とは何か

以上のように、小説『女王の飛翔』において、カマルゴとレイナは可視／不可視のもの、正典／異端、中心／周縁、排他性／周縁との親和性という対比を成す。異邦人との出会いは、確固たる自我を誇るカマルゴが忘却するアイデンティティの不確かさ、いわば異邦人性を照らし出す。物語は、「今、ここ」に囚われるカマルゴの視野狭窄と記憶喪失を、他者が炙り出す過程であるとも言えるだろう。

これらの構造そして人物造形の意味を考えるうえで検討したいのが、著者マルティネスが本作と同時期に発表したジャーナリストとしての仕事である。軍政崩壊後、約8年間の亡命生活を経て帰国したマルティネスは、「汚い戦争」で荒廃した祖国に衝撃を受け、その後も1989年に就任したメネム大統領が敷く強引な新自由主義政策によって、かつてなく貧富の差が広がり文化的・倫理的に退行する祖国に直面する。本作を挟むように発表されたエッセイ集『アルゼンチンの夢』およびその再編版『失われた国家へのレクイエム』は、民政移管後20年間に著者が著した文章の集成であり、3万人の行方不明者を生んだ軍政の悲劇を経て、また亡命経験者として、いま一度アルゼンチンとは何かを捉えなおした省察の成果である。

これらの論考を通して著者が可視化したものこそ、アルゼンチン人が抱える「記憶喪失」と「視野狭窄」という二つの病理に他ならない。マルティネスは帰国直後、彼を含む亡命者が祖国で不可視化されていることに衝撃を受ける。軍政下、アルゼンチンに残って政権に対抗した作家と、出国し外で書き続けることを選んだ作家は、「共存」のために過去を語らないことを選ぶ。さらにメネム大統領は、非人道的な犯罪責任のある軍人の多くに恩赦を与える。

「もはや過去から教わるべきことは全て教わった」と彼は言う。「(中略) 忘れることを学ばなければ、我々は塩の柱と化してしまう」と。だが随分前にアルゼンチンは忘れてしまったのだ。1983年まで続いた最後の軍政下での計画的暗殺について、粘り強い五月広場の母たちや人権団体を除き、ほとんど誰も語らない。拷問、子供の誘拐、囚人の財産篡奪、それらは色褪せた記憶だ¹⁹。

アルゼンチンの停滞の原因を、記憶、恨み、忘却への抵抗に帰するメネムに対し、マルティネスは「過去の理解なしに未来などありえない²⁰」と反論する。

着目したいのは、この国における記憶喪失の系譜が、地理的認識の歪みと密接に結びついていることだ。帰国後のマルティネスが抱いたもう一つの違和感は、国家テロリズムという未曾有の惨事を経た今でも、アルゼンチン人の多くが自国を西欧諸国に比肩す

る国家としてイメージし続けていることだった。亡命先のベネズエラから帰国したマルティネスは、アルゼンチン人の友人から「あちら側、ラテンアメリカに住むのってどんな感じ？」(傍点筆者)と問われ、激しく困惑したという。

そういう瞬間、私は時折、私たちはどこにもいないのだと感じてしまう—地理的な近接ゆえに属している大陸にも、運命的な因縁から属していると信じていたヨーロッパにも。言うならば、私たちは、宙に浮いている²¹。

西欧を範とし近代化を推し進めた、言わば「フランス文化とイギリスの権力の延長として自らをイメージしてきた国、スペインの植民者とイタリア移民の遺産を(中略)はねのけてきた国²²」であるアルゼンチンは、南米大陸に位置し、国民の多くが貧しい南欧系移民を祖とするにも拘わらず、近隣諸国に対する優越意識を持ち続けてきた。「野蛮の文明(“Una civilización de la barbarie”)(1986)で、マルティネスは、アルゼンチンの歴史が、野蛮を制するという名目で野蛮な手段を行使し、「他者」を排除してきた歴史であるとし、19世紀の土着文化の制圧から、危険分子の排除を謳った直近の「汚い戦争」までを一つの系譜に位置づける²³。

こうして浮かび上がるのは、記憶喪失と視野狭窄の下で書かれてきたアルゼンチンの大文字の歴史である。アルゼンチン人は、移民の子としての自身のルーツを忘却し、自らが犯した／被った暴力の記憶を視界の外に追いやることで、誇り高いアイデンティティを築いてきた。マルティネスの懸念は、視野狭窄に伴う歪んだ自己認識が、かつての自分たちと同じ周縁に位置する貧者や外国人に対する不寛容と、それに起因する過ちを反復するのではないかということだった。はたしてその不安は現実のものとなる。『女王の飛翔』の舞台である1990年代アルゼンチンは、まさに不寛容ゆえの人種差別が再燃した時期であった。メネム政権下で経済状態が悪化し、日々の生活に余裕をなくした国民は、その責任を「他者」である外国人に押し付け、国外の情勢にも無関心となる。「ベンガル作家に起きたこと(“Incidente con un autor bengali”)(1999)その他多くの90年代後半のエッセイで、著者は有色人種の人々やユダヤ人がアルゼンチンで受けた不当な差別の例を挙げている。

はたして、負の連鎖を止める手立てはないのだろうか。ここで取り上げたいのは、1994年のエッセイ「亡命という状態で(“En estado de exilio”)」である。著者は本作で、偶然目にしたサラエヴォの親子の別離の瞬間を捉えた写真から、自身を含めたアルゼンチンの亡命者へと思考を繋ぐ。

既にこうした悪しき風が通り過ぎ、国庫の権利譲渡や公務員の贅沢な暮らしといったより重要な問題ばかりが関心をもたれる国で、亡命について語ることはもはや無意味だと思えるかもしれない。(中略)それでもサラエヴォの長距離バスのイメージが、近ごろ私の脳裏から離れない。彼らに起こっていることは(中略)あらゆる人に起こりうる。そして私た

ちにも一度ならずそれは起こったのだ²⁴。

著者はエドワード・サイド「故国喪失についての省察」の冒頭部分を引きながら、亡命経験者を苛む、永遠に終わることのない「別離の悲しみを克服せんとする苦闘²⁵」を、自身の体験と共に吐露していく²⁶。

亡命とサラエヴォの写真は、ある意味でアルゼンチンのメタファーである—何かに、あるいは誰かに別れを告げる手、その手はガラス越しに、はるか以前に落ちた涙、あるいは永遠に落ち終わることのない涙の狭間にある²⁷。

マルティネスはここで、他者の苦境の情景から、不可視とされたアルゼンチンの記憶をも照射しようとしている。異邦人は、かつて「私たち」がそうであり、今もその残響の内にあるものの鏡である。『女王の飛翔』で著者が響かせ続けていたユーゴ内戦という他者の悲劇は、マルティネスにおいて、まさにアルゼンチンの近過去に連なりその記憶を想起させる、象徴的な出来事とみなされていたのだ。

ここで再び小説『女王の飛翔』に立ち返ろう。私たちが見てきた、自己愛的な主体としてのカマルゴ。デラシネとしての自分を強権的書き手となることで上書きし、周縁の人々を排斥するカマルゴ。そのありようは、マルティネスが亡命と帰還後に見出し記者として著してきた、不寛容なアルゼンチンの姿そのものである。マルティネスは、人種主義についてこう述べている。

世界は差異と相似から成り立っています。あらゆる差異には、それがどれほど明らかなものであっても、相似的な要素があります。そしてあらゆる相似には、常に差異の要素があります。私には、これは進歩的な考えであるように思えます。なぜならその考え方は、人種主義を無効にするからです²⁸。

モミールらと自身の間に差異しか認めようとしないカマルゴは、ホーム無き者としての自身の他者性を突きつけられた時、自我の崩壊に至る。ホセ・サエス・カペルは、資本主義化から取り残された南欧出身の人々を祖とするアルゼンチン人が、社会の周縁的な人々を糾弾するのは、自虐行為に等しいと指摘している²⁹。仮にもし、カマルゴがデラシネとしての自身に連なる者としてモミールらの窮状を見ていたら、そこには相互理解の余地が生まれ、ひいては自身との和解に繋がっていたのではないか。クリステヴァはフロイトの無意識の概念に照らし、次のように述べている。

外国人を検討するには自分自身を検討すればよい。自らの厄介な他者性を解明すること。

我々がしっかりと自分たちだけの《我々》にしておきたいもののまっ只中に影の如く出現する他者。それは悪魔の如く、脅威、不安を生む。しかしこの時出現したものがそ我々自身の他者性にほかならないのだ³⁰。

レコンキスタ通りの部屋に響いていた対位法の調べのように、他者のざわめきは、カマルゴに自身との対話を呼びかける存在だったのである。

一方で同じく明らかになるのは、レイナとブエノスアイレスの相関関係だ。「レイナ」(reina)とはスペイン語で女王の意を指すが、マルクス＝デルガードの指摘どおり、この語は「ラ・プラタの女王」(“Reina de La Plata”)と謳われた都市ブエノスアイレスをも想起させる³¹。かつて各国からの移民が最初に上陸し、その多様性のうちに育まれたブエノスアイレスの原形は、無限に周縁と繋がりを成し、ルンファルドと思しき混成言語を操るレイナそのものである。レイナは貧しい浮浪者や異邦人に溢れる現代のブエノスアイレスを、「幼虫に還りつつある蝶のよう」と称したが、この現象はカマルゴが考えるような「退化」ではなく、むしろ本来の姿に「回帰」するということなのではないか。

さらに、本書第一章で、レイナの肉体の傷を観察しながらカマルゴが展開する、「女たちは生きたことの一切を失わない。女はその身に起こるあらゆる物事を、一つの場所から別の場所へと携え、それらはあまりに多く蓄積されると、溢れ出し、否応なく日の目に曝される」(13)という考察は、無数の過去の記憶を秘めた都市を想起させる。この連想は、カマルゴの陰惨な復讐の意義に、いま一つの解釈を加えるように思われる。批評はこれまで、この行為を腐敗に満ちたメネム政権下アルゼンチンへの制裁³²、軍事政権下における拷問と、軍政崩壊後も社会に内在する父権・権威主義的な精神性³³、フアン・ドミンゴ・ペロン元大統領とその妻エバの男尊女卑の関係等³⁴のメタファーであると分析してきた。だがむしろ重要なのは、これら複数の暴力と不寛容の記憶が、多層の波のように想起されることではないか。レイナ＝ブエノスアイレスは、多様な背景を持つ人々と連なり、さらに公の言説が捨象してきた、あらゆる不可視とされた負の記憶を、その身に息づかせているのである。

本章では、トマス・エロイ・マルティネスのジャーナリストとしての言説を手掛かりに、小説『女王の飛翔』の人物たちに仮託された意味を明かしてきた。倒錯した関係を成すカマルゴとレイナは、亡命と帰国という体験を経てトマス・エロイ・マルティネスが見出した、自己愛的幻想に満ちたアルゼンチンと、その本来の姿を想起させる多層のブエノスアイレスを体現していると考えられる。マルティネスは、「我々アルゼンチン人は歴史を置き去りにしてきた。自分たちを一もしかしたらこのうえなく豊かであるかもしれない—あるがままの私たちではなく、そうであるはずの姿であると信じて。その姿とは、おそらく無である³⁵」と書いている。レイナの眼に可視化され、モミールらが体現するブエノスア

イレスのハイブリッド性は、カマルゴが堅持する不寛容で排他的なアルゼンチンに対するアンチテーゼとして機能しているのである。

VI. おわりに一女王の飛翔

以上のように、小説『女王の飛翔』は、二人の人物、彼らを取り巻く異邦人をして、排他性と多様性というアルゼンチンの二面性を表象している。最後に結末を通して、この物語に託された意味をもう少し考えてみよう。

モミールによる暴行後、自宅で目覚めたレイナは、自身が暴行されたという事実は理解するものの、その状況は全く記憶にないという恐怖を味わう。その後の診察によって自分が HIV に感染した可能性があること知り、さらに昏睡中にディアリオ誌からは解雇され、恋人のヘルマンとも別れることになる。レイナは身体的、精神的、社会的に傷を負い、まさに全てを失う。しかしカマルゴの思惑に反して、彼女は彼の元に戻ることを拒否し、さらに親元に帰るという選択肢も一掃する。

実家へ帰ると想像することは、病気や貧窮よりも彼女の恐怖を呼び起こした—そんなことをすれば、彼女は彼女でなくなってしまうだろう（中略）平坦な空の上には唯一神が君臨し、双子の救世主や女性原理によって創られた世界、権力者らに対する貧者の最終的勝利を考える自由は消えてしまうだろう。自由がなければ、怒りと不幸があるばかりであり、彼女は彼女ではなく、彼女の母親になってしまうだろう。（266-267）

レイナがこだわり続けた異端思想は、ここであらためて彼女のアイデンティティを象徴するものとして想起される。彼女が選ぶとる位置は、書かれなかった物語、女性、貧者という周縁の人々の内にある。絶望的な状況にあって、レイナは服従を迫るあらゆる力を否定する。実家に帰らないという選択により、実は彼女は勝利しているのである。

一方カマルゴの精神は、難民の女からの「あなたは誰？」という問いを契機に崩壊していく。あらゆる力を行使してもレイナを取り戻せないと知ったカマルゴには、ついに母親とレイナの区別がつかなくなり、二度と彼女=母が自分を捨てることのないようレイナを殺害する。その後無罪判決を受けた彼は、難病を発症して身体的自由を失い、復縁した妻に介助され余生を過ごす。彼は性的不能を周囲に悟られることを怖れつつ、他人に依存して生きることに快感をおぼえるようになる。かつて全能であることをアイデンティティの拠り所としていた彼は、レイナと対照的に、自分自身を失うのだ。彼はもはや書くことにも確信を持たなくなる。

現実にはもはや関心がなかった—その日のニュースは翌日のニュースに消し去られるとわかっていたし、どんなニュースも記憶には残るまい。世界の悲劇も生き物と同様、早晚死ぬ運命にあるのだから。（294）

カマルゴは小説を書き始めるが、それとて誰かが書いたものの反復でしかないという疑念を拭えない。彼はこうして、社会的名声を保ちながらも抜け殻となって生涯を終えるのである。

レイナが周縁性という原点を再認した後に誇り高く死に、偽りの自己像に囚われたカマルゴが我を忘れて罪を犯し、自己懐疑の内に消滅する—対照的な結末にマルティネスが表したものは、忘却と視野狭窄のはてに今再び不寛容という罪に陥ろうとしているアルゼンチン社会への警告、そして再浮上への手掛かりなのではないか。

異邦人の坩堝としてのブエノスアイレスの現在を見つめることは、アルゼンチンの人々に、異邦人たる自らの起源をいま一度想起させ、他者の排除という暴虐の反復を抑止する。注目すべきは、レイナが周縁性を自由と表現していることだ。それはまさに、雑多なものから成る多様性こそ、社会に柔軟さと可能性を与え得るという見解に他なるまい。マルティネスはアルゼンチンを、一方に「不寛容と憎しみ」が、他方に「ヨーロッパ人、アジア人、メスティーソらの無限の血によって豊かになり（中略）その伝統が異種混合的な多様性の娘たちであるような国」の両面が共存していると称する³⁶。民政移管後のアルゼンチンにおいて、マルティネスは過去の記憶と現在の苦境に視野を歪めることなく向き合い、その縁として他者に目を開く複眼的視点の保持を、祖国の人々に促しているのである。

最後に、本作の登場人物の特性、その関係転覆の過程が、一貫して言語や言説を通して表されていた意味を考えれば、そこには作家としてのマルティネスの姿勢が暗示されているように思われる。著者は大きな物語が不可視とした現実を暴露するというジャーナリズムの意義を認識しつつ、その言説が同じように一つの現実を規定してしまう危険も痛感していた。これに対抗しうる営みは、書かれたものの外にあるもの／人物の存在を常に想像するという記者一人一人の自覚に他なるまい。マルティネスは「ジャーナリズムとは、他者の立場に身を置くこと、異なるものを理解すること。そして、時には、他者になることである³⁷」と述べている。この意識こそ、書き手と読者を視野狭窄から解放するものとなるろう。

さらに主人公が突き当たる、瞬時に忘れられる報道の言葉の限界に相対するものとして、レイナが小説やエッセイを志向することは興味深い。本作最終段落で、カマルゴは「小説とは高みを目指して盲目的に飛翔する女王蜂、それは上昇の途上で見つけたあらゆるものを、一抹の情けも後悔もなく自分のものにする」(296)と言う。マルティネスは生涯を通し、記事やコラムと小説の双方を書き続けたが、それはおそらく、ジャーナリズムによって周縁の人々に光を当て、小説によってその事実を永遠に生き永らえさせることを、彼が互いに補完する営みと考えていたからではないか。「あらゆるジャーナリスティックな物語は、何よりも忘却に抗うために存在する³⁸」というその言葉を併せて考えるなら、この「小説」こそ、彼が辿り着いたハイブリッドなエクリチュール、ジャーナリズムの手法で書かれた小説を指しているように思われる。現実と非現実の狭間に全てが可視化されたアルゼンチ

ン像を描き出すこと。それがマルティネスの狙いだったのではないだろうか³⁹。

起こったことの全てを自分のものにする小説は、あらゆる経験をその身体にとどめる女性＝ブエノスアイレスのイメージに贍写される。テキストとなったラ・プラタの女王は、その光と影の総てを取りこみ、目くるめく飛翔を続けている。

※本稿は第4回世界文学・語圏横断ネットワークでの口頭発表「変容する地図—トマス・エロイ・マルティネスにおけるアルゼンチンの座標」（2016年4月9日、於・東京大学）の一部を発展させたものである。当日貴重なご意見を下さった皆様にお礼申し上げます。

注

1. Martínez, Tomás Eloy. *El vuelo de la reina*. Madrid: Alfaguara, 2002. 以下、本書からの引用は全てこの版から行い、括弧にページ数のみ記す。また訳は執筆者による。
2. King, John. "Introduction", *Bulletin of Latin American Research*, 31(4), 2012, p.423
3. Martínez, Tomás Eloy. *El sueño argentino*. Planeta:Buenos Aires, 1999.
4. Martínez, Tomás Eloy. *Réquiem por un país perdido*. Aguilar: Buenos Aires, 2003.
5. ハラウェイ、ダナ 『猿と女とサイボーグ：自然の再発明』 高橋さきの訳、青土社、2000年、368頁。
6. 同上、371頁。
7. クリステヴァ、ジュリア 『外国人：私たちの内なるもの』 池内和子訳、法政大学出版局、2014年、8-9頁。
8. Davies, Lloyd Hughes. "Sexual/ Textual Anxieties: Refashioning Borges in Tomás Eloy Martínez's *El vuelo de la reina*", *Bulletin of Spanish Studies: Hispanic Studies and Researches on Spain, Portugal and Latin America*, 85(2), p.219. DOI:10.1080/14753820701855299
9. Marcus-Delgado, Jane. "Public, Private, and Political Corruption in *El vuelo de la reina*", *Ciberletras*, 9, 2003. URL:www.lehman.cuny.edu/ciberletras/v09/marcus.html
10. Parys, Jodie. "The Body as Weapon: HIV as Revenge", *Ciberletras*, 14, 2005. URL: www.lehman.cuny.edu/ciberletras/v14/Parys.htm
11. ソンタグ、スーザン 『隠喩としての病・エイズとその隠喩』 富山太佳夫訳、みすず書房、2012年、138頁。
12. 同上、108頁。
13. Schmidt-Cruz, Cynthia. "The Argentine "Novela Negra" Critiques the 1990s in "El Vuelo de la reina" by Tomás Eloy Martínez and "El muerto indiscreto" by Rubén Correa". *Chasqui*. 39(2), November 2010, pp.171-191. URL:sites.google.com/site/chasquirll/
14. ゴイティソーロ、フアン 『サラエヴォ・ノート』 山道佳子訳、みすず書房、1994年、10頁。
15. クリステヴァ、前掲書、10-11頁。
16. たとえば彼女はカマルゴを "Bitte" と呼ぶ。ドイツ語では礼節を示す意味があるため、カマルゴはこれを自分への敬意をす愛称であると都合よく解釈するが、レイナは "Camargo" という綴りに含まれる "amargo" (苦い) というスペイン語の英訳 "bitter" の省略形として彼を Bitte と呼んでおり、密かに偏狭な性格を揶揄している (223)。
17. Aragón Guiller, Francisco Carlos María. "Alquimistas del poder: El silencio contundente de la mujer en *La muerte de Artemio Cruz*, *El vuelo de la reina* y *Luna caliente*". *Especulo: Revista de Estudios Literarios*, 32, marzo-junio, 2006. URL: webs.ucm.es/info/especulo/numero32/alq poder.html
18. Martínez, *El sueño argentino*, p.19. 訳は執筆者。
19. Martínez, *Réquiem por un país perdido*, p.35. 訳は執筆者 (以下同)。
20. 同上、p.137.
21. 同上、pp.20-21.
22. 同上、p.73
23. 同上、pp.57-78.
24. 同上、p.80.
25. サイド、エドワード 『故国喪失についての省察 1』 大橋洋一、近藤弘幸、和田唯、三原芳秋訳、2006年、174頁。
26. マルティネスの遺作 『煉獄 (*Purgatorio*)』 (2008) は、失った時間を決して取り返すことができないという亡命経験者の苦しみを、行方不明者を待ち続ける遺族の苦しみと重ね、「煉獄」として描き出した寓話である。
27. Martínez, *Réquiem por un país perdido*, p.83.
28. "El mensaje oculto de 'El vuelo de la reina'", *Clarín.com*, 7 de mayo de 2002. URL: www.clarin.com/sociedad/

mensaje-oculto-vuelo-reina_0_BJSG7reRKl.html 最終閲覧 2018 年 11 月 30 日。

29. Sáez Capel, José. “Los inmigrantes y la discriminación en Argentina”, *Scripta Nova: Revista Electrónica de Geografía y Ciencias Sociales*, 94 (31), agosto, m2001. URL: www.ub.edu/geocrit/sn-94-31.htm
30. クリステヴァ、前掲書、233 頁。
31. Marcus-Delgado、前掲論文。
32. 同上。
33. Parys、前掲論文。
34. Davies, Lloyd Hughes. “Sight, Sensibility, Simulation: Tomás Eloy Martínez’s El vuelo de la reina”, *Neophilologus*, 92, 2008, pp.63-76. DOI:10.1007/s11061-007-9061-0
35. Martínez, *Réquiem por un país perdido*, p.440.
36. 同上、p.243.
37. García, Rocio, y Rosario G. Gómez. “El periodismo es un acto de servicio”, *El país*, 19 de mayo de 2009. URL: elpais.com/diario/2009/05/19/sociedad/1242684004_850215.html 最終閲覧 2018 年 12 月 14 日。
38. Martínez, *Réquiem por un país perdido*, p.420.
39. 記憶が堆積したブレノスアイレス、アーカイヴとしての小説のありようは、次回作『タンゴ歌手 (*El cantor del tango*)』(2004) の主題となり、さらに遺作『煉獄 (*Purgatorio*)』(2008) において、亡命者と行方不明者の失われた歲月という想像の時空間をも取り込んだ表象の試みへと深化していく。これらについては考察を別の機会に設けたい。

参考文献

- 柴宣弘編著『バルカンを知るための 66 章』第 2 版、明石出版、2016 年。
- 杉山和子『国家テロリズムと市民：冷戦期のアルゼンチンの汚い戦争』北樹出版、2007 年。
- ソントグ、スーザン『他者の苦痛へのまなざし』北條文緒訳、みすず書房、2003 年。
- トーピー、ジョン『パスポートの発明：監視・シティズンシップ・国家』藤川隆男監訳、法政大学出版局、2008 年。
- バージャー、ジョン『見るということ』飯沢耕太郎監訳、笠原美智子訳、白水社、1993 年。
- バルト、ロラン『言語のざわめき』花輪光訳、みすず書房、2000 年。

L'Étranger in Buenos Aires:

Tomás Eloy Martínez' *El vuelo de la reina*

Miyuki Yamada

This paper examines *El vuelo de la reina* (2002), the fifth novel by an Argentine novelist and journalist Tomás Eloy Martínez (1934-2010), referring to the two compilations of his journalistic works published just before and after the novel: *El sueño argentino* (1999) and *Requiem por un país perdido* (2003), in order to review how his view on Argentine people has been represented in the characters and structure of the novel.

The first half of the study focuses on the comparisons between two protagonists of the novel, Camargo and Reina. Each character symbolizes opposite values such as visible and invisible, orthodox and pagan, center and periphery, and exclusiveness and diversity. As a powerful figure in an Argentine journalistic world, Camargo seeks for sole reality, while Reina is attracted to the residual, unwritten, unofficial story and history. Also, their differences are reflected on their attitudes to “the others”. Reina is aware of minority or marginalized people in the city of Buenos Aires, such as foreign immigrants and homeless people. On the other hand, Camargo’s view on war refugees from Kosovo is penetrated with lack of interest and prejudice. The paper points out that Camargo turns to power and authority to forget his traumatic past, and that his self-reliance has been turned down mediated by memories and languages.

Taking this structure into consideration, the study refers to Martínez’ view on post-dictatorship Argentina, as shown in the above-mentioned journalistic essays. In these essays, based on his own experiences during and after the exile over the course of the dictatorship, he accuses his compatriots of their forgetfulness, self-pride and sense of superiority. To forget their roots as descendants of the immigrants and past tragedies caused from the intolerance to the others can lead to the rise of racism, leading to the repetition of the historical mistakes. To prevent this, Martínez suggests seeing the other people’s sufferings as their mirror, as something that recalls their own problems and history.

Regarding these remarks, I conclude that Camargo’s character in *El vuelo de la Reina* is a metaphor of present Argentina, and Reina signifies the real state of Buenos Aires which can be antidote to the former. The hybrid status of Buenos Aires reminds Argentine people of their origins and works as antitheses to the intolerance and exclusiveness. Through contrastive endings the characters face, Martínez urges their compatriots to face memory of the country’s past and current hardships, through looking at the others around them. In addition, the paper considers Martínez’ view on journalism and fiction, and the meaning of his choice of genre.